

## 第15回日本柔道整復接骨医学会学術大会盛大に開催

古都京都に学ぶ

広報部のクタクタ日記 Part 6

今年もやってきました日本柔道整復接骨医学会。今回は、11月25日（土）・26日（日）の両日紅葉で賑わう古都京都にある明治鍼灸大学において盛大に開催されました。本大学には元会員の竹内義享先生が教授として赴任されておられるので、久しぶりの再会に胸をときめかせながらの出発となりました。

それでは、お届けします！好評シリーズ（勝手に思い込んでいるだけ）広報部の「クタクタ日記」第6弾です！

〔一日目〕

今回は、遠方の会員への配慮か、開始時間が午後1時とかなり遅くなったため、早朝から午前9時30分までしっかり？仕事をして、駆け足で「えちぜん鉄道」に飛び乗る。福井駅で10時46分発の「サンダーバード18号」に乗り換え、一路京都に向う。車中では読書などせず、もっぱら抄録集に目を通してしっかりチェックする。今回は、広報の編集に追われまったく抄録集を読んでいなかったためチョーアセアセ状態で、これもあれも聴きたいと迷っているうちにあっという間に京都駅どすえ〜。「なんや、この人の多さは！ちょっとどいとくなはれ！」と心の中で叫びながら、観光客で混雑している構内を走りぬけ山陰本線ホームに向う。列車が京都駅を離れていくと、「えっ、ホンマに京都」と思うほど山と田に囲まれた農村風景が広がっていく。園部駅で下車し、シャトルバスでようやく明治鍼灸大学に到着。竹内先生から聞いてはいたが、確かに周囲は山だらけで研究にはまったく申し分のない素晴らしい環境である。時間は午後1時20分。大急ぎで受け付けを済ませ、「さあ、勉強するぞ！」と気合を入れて会場に向かうが空腹には堪えきれず、会場手前で急カーブし学食に駆け込む。腹が減っては軍（勉強）は出来ぬだ！

まずは、大会会長の中川雅夫明治鍼灸大学学長の講演を聴くためにA会場に入る。演題は「組織循環制御の分子機構」で、血管壁を介する血液凝固の制御調節メカニズムを中心に概説をされていた。なんでも、血液凝固の制御調節は組織循環に重要な役割を担っているとかで、血管壁機能、血液成分などの相互反応を分子レベルで詳細に説明されていたのだが、まったくの理解不能状態でわが身の勉強不足にただ啞然とするばかり。高見盛が負けて花道をガックリと肩を落として引き上げるが如く会場を足取り重く後にする。

気を取り直して、次は柔整鑑別診断一般発表のD会場に入る。レントゲンやMRIなどの検査機器を持たない我々柔整師にとって、いかに鑑別診断が重要かは今更言うまでもない。しかし、言うは易く行うは難しで、いかに機能解剖の熟知と豊富な臨床経験が必要か改めて思い知らされた次第である。中でも興味を引いたのは、実際に大学医学部の実習解剖体で研究した「後骨間神経の締扼因子に関する解剖学的研究」「腓靭帯の形態から見た弾発指の発生について」

「大胸筋の筋繊維の構築について」などである。後骨間神経の締扼因子は、フローゼ

のアーケード以外に短橈側手根伸筋近位部などの周囲組織もなりえること、腱の横径から狭窄率を測定し、弾発指が母指、中指に発生しやすいことを導き出していること、大胸筋の筋繊維はねじれとずれによって構成されていることなど、日頃我々柔整師が実習解剖体で研究する機会は皆無に等しいだけに新鮮でよく理解できた。フロアから大学医学部の先生が、「横径のみの測定では不十分ではないか」「大胸筋の筋繊維については、運動学や力学的な考察も入れてはどうか」などかなり専門的な質問やアドバイスがあったが、是非この点も参考にしながら今後の更なる研究を期待したいものである。

整復治療手技の発表を聴くために途中でD会場を出ると、福井地区の先生方にバッタリと鉢合わせをする。乗用車で来たので渋滞に巻き込まれ、少し遅れたとのことである。挨拶もそこそこに、お互いに健闘？を誓い合いながら足早に目的の会場に向う。

整復治療手技の発表があるE会場に入ると、ちょうど「小児肘内障整復法についての考察」の発表で、学童期の整復困難な2例を紹介していた。発生機序から整復法について文献的な考察を加えての発表だったので、実に分かりやすかった。特に、相手が小児だけに「泣く子と地頭には勝てない」ではないが、一度で整復しないと泣いて怖がってしまうので、そう何度も整復を試みることはできない。したがって基本的な4つの整復法は常に頭に入れておくべであろう。良い復習になった。「小児 floating elbow の一症例」「両側に発生した踵骨関節外骨折の一症例」は、日頃めったに遭遇しない症例なので大変勉強になった。他には「肩関節伸展制限改善のための腋窩運動法」「肩関節外転障害に対する僧帽筋へのアプローチ」なども参考になった。肩関節伸展制限には大胸筋がポイントであること、肩関節外転制限には肩甲骨の回旋運動にかかる僧帽筋、肩甲骨背部への施術をすると効果大とのことである。まあ、このへんはもう常識となっており、既に会員の皆さんも当然取り入れているのではないだろうか。

次に、スポーツ柔整の発表を聴くためにF会場に入る。やはり人気のある分科会の発表だけあって立見席が出るほどの賑わいである。人をかき分けて（ゴメンナサイ）中に入ると、案の定斉藤和利・東谷両先生が最前列に陣取りビデオ撮影をしているのではないか。日頃からスポーツ外傷・障害に熱心に取り組んでいるお二人であるから、むべなるかなである。感心、感心。途中で入場したので、「内側型野球肘の考察－X線検査により骨に不整が認められた症例から－」が終わろうとしていた。残念無念！まあいいか！気持ちを入れ換えて、残りの3題を聴くことにする。中でも特に興味を引いたのは、「鼠径周辺部痛症候群に対する保存的療法」である。鼠径周辺部の痛みは、何らかの原因で股関節周辺の筋肉のバランスが崩れ、股関節の土台となる骨盤の安定性が保てなくなり発生すると考えられるので、患部を庇うことによる代償動作の把握、筋緊張の除去、股関節周辺の筋力低下の改善が必要であるとのことである。つまり、可動性・安定性・協調性を念頭においたトレーニングがいかに大切かということであろう。発表が終ってふと時計を見ると、午後7時になっており外はもう暗闇の中である。これで一日目の発表は全て終了である。会場の玄関で斉藤・東谷両先生としばらく談笑した後、シャトルバスに乗り込み園部駅に向う。そのまま東舞鶴行き普通列車に乗る。車窓から眺める景色は当然ながら真っ暗である。時折ビルの明かりが眼に入るがそれも一瞬で、またもとの暗闇に戻ってしまう。ホテルがある東舞鶴もひ

っさりとしているのだろうかと思われ心配をしているうちに東舞鶴駅に到着。幸い、駅前には明るいのでホッとする。時間はもう午後9時を過ぎてしまっている。慌ててタクシーでやっとホテルに到着する。ホテルのレストランで遅めの夕食を摂り、重い足取りで部屋に入る。ああ疲れた、それにしても東舞鶴はなんて遠い所なんだ！予約が遅かったため、大学の近くや京都市内でホテルがとれずやっと東舞鶴で取れたのだが、まさかこれほど遠いとは・・・・・・私がいけなかったのです、反省しています！会員の皆さん、ホテルの予約はお早めに！

## 〔二日目〕

朝6時に起床し、早めに朝食を摂り大急ぎで東舞鶴駅へ向う。園部駅行き特急に飛び乗り、園部駅からはシャトルバスでなんとか開始時間の午前10時少し前に会場に到着。なんら躊躇することなく、そのままスポーツ柔整・バイオメカニズム合同シンポジウムがあるC会場に入る。やはり、斉藤・東谷両先生が既に最前列の席に着いてスタンバイしている。テーマは「スポーツ・運動におけるコンディショニング」で、モンゴル相撲「ブフ」と日本の大相撲を比較し、モンゴル力士の強さの秘密や股割り（腰割り）の効果を科学的なデータをもとに検証していた。朝青龍のトレーナーでもある（財）日本アンチドーピング機構の山崎泰央先生によると、モンゴル力士の強さの要因は精神面と肉体的な面があるとのことである。つまり、精神面ではモンゴル人の力士は日本人の力士と違って愛国心があり、貧困からか家族を支えなければというハングリー精神が強く、しかも言語や生活習慣などの外国異文化への吸収能力の素晴らしさがあるとのことである。また、肉体的な面では日常生活から自然と身についた足腰の強さがあるとのことである。確かに言われてみればナルホド納得である。あの流暢な日本語は実に見事なものであり、適応力のすごさには驚くばかりである。また、幼い頃から乗馬で鍛えているためか足腰がものすごく強く、特に大腿四頭筋が異常に発達しているそうである。ましてや愛国心に至っては、日本とは雲泥の差である。日本における最近の愛国心をめぐる論争を思うと、実に情けないかぎりである。祖国に誇りを持ってなくて、国を愛する気持ちなど持ちようがないと思うのだが・・・・。

次に、シンクロナイズスイミングのコーチであった筑波大学体育科学系助教授白木仁先生が1400年の歴史を持つ大相撲の基本的なトレーニングのひとつである股割り（腰割り）がトレーニングリハビリに適用できないかということで、筋電図を使用して科学的にスクワットと股割り（腰割り）を比較検討していた。それによると、股割り（腰割り）は通常のスクワットよりも大殿筋を使っており、股関節可動域改善のトレーニングとして有効であり、転倒予防などにも十分応用が可能とのことである。また、現在のトレーニングリハビリはあまりにもマシンに頼り過ぎるので、この自重で行う股割り（腰割り）は手軽でどこでも出来るので是非見直す必要があると指摘されていた。

最後に、シンポジスト3名がまとめとしてなぜモンゴル力士、特に横綱朝青龍が強いのかをあらゆる角度からの検証を試みていたが、結局結論が出ず今後の検討課題となった。今後の研究を期待したいものである。ちなみに、ちょうどこの日が大相撲九州場所の千秋楽であったが、横綱朝青龍が見事全勝優勝を果たしている。う～ん強すぎる！何でだろう？

充実した2時間のシンポジウムが終わりC会場を出ると、宮下会長と宮下総務部長の姿が見えたので、急いで駆け寄り挨拶を済ます。学食で昼食を摂りながら、午後の部をチェックする。

午後1時より教育セミナーがあるため、少し早めにA会場に入ってビデオをセッティングして開始を待つ。相変わらず斉藤先生は正面の絶好のポジションにいる。抜かりないなあ……。演題は「スポーツ外傷と障害」で講師は明治鍼灸大学大学院教授平澤泰介先生である。先生は、年齢層に特異的なスポーツ外傷・障害を中心に、基本的な事項から最新の知見について非常に分かりやすく説明されていたので、知識の整理ができ大変勉強になった。このセミナーだけでも来た甲斐があったというものだ。

次に、実技発表があるG会場に向う。会場前で、山中利美・山本嘉久両先生に会う。聞くと昨日から来ていたとのこと、本当に福井地区の会員は熱心である。そのまま会場に入ると、実技重視の発表だけに興味があるのか、大勢の人で一杯である。たぶん、今年から実技重視の日整実技研修会が無くなったため、新たに実技発表が加わったのであろう。なんとか、前の席を探して座るとなんと浅田先生が隣でビデオを撮っているではないか！みんなスゴイねえ～

既に発表は7題終わっており、次からの発表をじっと待つ。山中・山本両先生、そして斉藤先生も続々入場し前列に座りスタンバイ OK！ いよいよ発表開始である。特に興味を引いたのは「有痛性外脛骨のテーピング療法」「鎖骨外端部骨折の簡易固定法」「肩関節脱臼における外旋位固定の有効性」である。

有痛性外脛骨のテーピングは、通常足底アーチの保持を目的に足底挿板等を使用するが、この発表では後脛骨筋、足底筋膜、舟状・外脛骨靱帯をポイントに伸縮テープのみを使用していた。しかも、ビデオで実際の巻き方を紹介していたので非常に助かる。これは使える！鎖骨外端部骨折の簡易固定法では、自ら考案した、患者にとって窮屈でなくしかも再転位しにくい固定装具を紹介していた。肩関節脱臼における外旋位固定の有効性では、昨年実技研修会で東北大学整形外科教授の井桶栄二先生が外旋固定の有効性を発表されていたが、今回は実際の症例でその有効性を実証したわけである。特に、内旋固定よりも再脱臼率が低く、反復性脱臼予防には最適とのことである。先の発表もそうであるが、発表後に固定を実演してくれるので大変有難い。

発表の合間の休憩時間に、自動販売機でコーヒーを飲んでみると、竹内義享先生に声をかけて頂いた。久しぶりの感動的な再会である。実は、昨日も姿を見かけたのであるが、何せ本大会の理事として忙しく動き回っておられたので声をかけられず、もう会えないと思っていたのでまさかここで会えるとは！感激である。相変わらず、先生はお元気で研究心旺盛である。自分も頑張らなければ！

発表を聴き終わり、竹内先生に別れの挨拶を済ませ大急ぎでシャトルバスに乗りこみ、園部駅から普通列車で京都駅に到着。観光客で混雑しているホームを華麗な？フットワーク（もうヨレヨレ）でサンダーバード自由席乗り場へ行くが、長蛇の列に仰天する。これに並ぶの？ウッソオ！である。結局福井駅まで立ちっぱなしで、無事我が家に着いたのが10時を過ぎていた。年々寄る年波には勝てず？であるが、体力が続く限り学会に参加したいと思っている。来年は北海道で開催とのことである。モチロン行くつもりであるが、来年になってから財布と相談して決めることにしたい。

(完)

(文責 森瀬 則昭)